

世界の見え方

中 三

あなたが見ている世界はどのように見えているだろう。

僕の弟は、「ビジュアルスノウ」という視界が見えづらい症状と共に毎日生活している。そのことが分かったのは、弟が四年生のときに行った色覚検査で「異常あり」のお知らせが届いたことがきっかけだった。母や父も心配し、目のことについていろいろ弟に質問したが、そのときは異常に気付くことはできなかつた。しかし、ある日、弟がぼつりと「今日は砂嵐がひどい。」と言った。家族で詳しく弟に聞いてみると、弟は物心ついたときから普通の景色の上にカラフルな砂嵐が覆い被さって見えていたそうだと。それに加え、いろいろな色の複数の丸がふくらんでは消えるというようなことがあり、マーカーペンで引いたような色のついた線も、点滅しながら視界の中に常にあるとも言っていた。物心ついたときから、このように見えているので、これが当たり前で、周りの人

もこう見えているのだと思っていたそうだと。そのとき、僕はそんな見え方があるということに驚くとともに、ある日の弟との会話を思い出した。弟は算数が得意でいつも勉強も頑張っているのだが、グラフや作図の問題で間違いが多かったときに、「こんな簡単なのに間違えちゃったの。」と僕が言うと、弟は少し悔しそうにしていたのである。弟は問題が分からなかったのではなく、細かいグラフの線や、分度器の目盛りなどが見えづらかつたのだ。僕が当たり前前のように見えていた世界は、弟に見えていた世界とはまったく違うものだったのだと初めて分かった。また、弟が誰にも知られることなく今までしてきた苦労や、自分が何気なく言ってしまった言葉に弟が傷ついていたのであることに気付き、ショックを受けた。

世界は一つしかない。しかし、目が見えない人には黒い景色かもしれなく、視力の弱い人には景色がぼやけていたり、弟のように砂嵐のように見えていたり、人によって世界の見え方は変わるのだと気付いた。自分が当たり前前のように思っていることでも、他人にとってはとても大変なことにもなるのだ。

僕は弟に見えている世界を想像してみた。とてもではないが、砂嵐などが邪魔で細かいものは見えづらいし、きれいな青空や大好きな人たちの顔がクリアに見えないのは悲しい。この症状はあまり認知されていないらしく、治療法もまだ無いそう。しかし、僕がこの作文を書くことによって、このように大変な思いをしている人たちがいるということが、一人でも多くの人に認知されてほしいと思った。そして、自分も弟や周りの人が何かに困っていたら、気持ちに気付いて寄り添ってほしい。

弟は視界のせいもあるのか、とても転びやすい。暗いところを歩いていたり、何気なく手を繋いであげると弟はすごく嬉しそうな顔をして笑った。治らない症状だとしても、周りの人がこうして思いやる心をもつことで、新しい景色を創り出せると思う。一人一人見えている世界は違ったとしても、人の優しさや、相手を思いやる気持ちがこの世界にはある。たとえ物理的に見えるものは違っていても、目に見えないがそれ以上にきれいで温かみがあふれる幸せな世界を僕たちは創ることができる。みんなが幸せに過ごす社会に見え方など

関係ないのだ。だから、見え方が人と違う弟を僕
はかわいそうだとは思わない。弟や全ての人が幸
せに生きていける世界を、これから僕たちで創っ
てみせるから。